

変則マルチアンプシステム(7)
—TELEFUNKEN L61 の置き換え—

1. 始めに

前報(5)と(6)では、JBL4350A の 250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域をそれぞれ EMI DLS259 と Goodman の AXIOM80 に置き換えてみましたが、今回は TELEFUNKEN L61 に置き換えてみます。

2. ミッドバスからツイーター領域の置き換えの試聴方法

JBL4350A のマルチアンプシステムのダブルウーファーとスーパーツイーターをそのまま使って、250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域は現在の 45pp アンプで Goodman の AXIOM80 を駆動します。従って、TELEFUNKEN L61 は 250Hz~1.25KHz の帯域のみを使用することになります。

入力信号のルートとしては現在の標準となっている次のルートを使用します。

EMT981 (44.1KHz) /BZT-9000→ CCV-5 (96KHz) →SWD-DA10 (192KHz)
→DA-3000 (44.1KHz) →MYTEK DIGITAL 192-DSD

ここで、EMT981 には GPS-777 から 44.1KHz のクロックを、CCV-5 には 96KHz のクロックを、SWD-DA10 には 192KHz のクロックを供給します。また DA-3000 には ABS-7777 から 44.1KHz のクロックを供給します。

3. ミッドバスからツイーター領域の置き換えの試聴結果

今回は TELEFUNKEN L61 を用いて JBL4350A のマルチアンプシステムの 250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域を受け持たせてみたわけで、前報(3)では TELEFUNKEN L61 のアンプは Langivin 6V6pp でしたが、今回は JBL4350A のマルチアンプシステムの 250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域を受け持つ 45pp アンプをそのまま使用しています。

こういった変則システムは組み合わせるスピーカーの音色の違いなどで違和感が残るのが通例ですが、前報(3)と同様に意外に馴染がいいというのが第一印象です。

TELEFUNKEN L61 の側からの変化を述べますと、高域の倍音が伸び、低音の響きや沈みこみがまったく違うことは前報(3)と同様です。先の EMI DLS259 では、EMI DLS259 の持ち味と JBL4350A の持ち味の mismatch で地味になりすぎたきらいがありますが、TELEFUNKEN L61 は EMI DLS259 より陽性のところがありますので結構しっくり行っているところもあります。

JBL4350A のマルチアンプシステムの側からの変化を述べますと、**JBL4350A** の個性が消え去り、**TELEFUNKEN L61** 中心の音になってしまったと言えます。

4. まとめ

米国西海岸の製品にドイツのスピーカーの個性が割り込んでどうかと思いましたが、**TELEFUNKEN L61** の個性中心の音でありながらワイドレンジ化した印象です。

以上